日本語教科書における「接辞的漢語」

山下 喜代

【キーワード】日本語教科書　漢語　接辞　複合形態　単位語

要　旨

本稿は、日本語教科書を資料として作成した【日本語教科書出現漢語対照語彙表】を基に、日本語教科書において結合成分として提示されている「形態」を「接辞的漢語」と仮称し、それを「語構成上の機能」「承接型及び品詞性」「教科書間の共通度」の三点から分析し、その特徴を明らかにしようとしたものである。調査対象の教科書においては、一般に言われる「漢語系接辞」は「接辞」として提示されるものより、三字漢語などの構成要素として出現するものが多く、特に「前部分（接頭辞）」にその傾向が強かった。また「後部分（接尾辞）」では数詞に承接するもの、意味分野では［時］を表すものが極端に多くなっている。形態的には多様で、一般的には単位形と認めにくい特殊な「複合形態」も出現する。そして、それらを日本語教科書における特徴的な「接辞的漢語」と位置づけ考察した。

1．はじめに

日本語教育においては、「どのような語彙をどのような形態で学習語彙として提示するか」ということは、多様化する学習者のニーズに対応していくために常に検討されるべき基本的な問題である。

本稿は、日本語教科書に出現する語彙を「漢語」に焦点を絞り、調査・分析した報告の一部である。そしてこれは、「どのような語彙をどのような形態で提示するべきか」という問題を考えるための一つの資料を提供するものである。

国内出版の初級教科書10種と中級教科書5種を資料として(1)、それぞれの教科書の巻末索引から漢語を抽出し（延べ語数 10049語、異なり語数 4470語）、【日

本語教科書出現漢語対照語彙表】を作成した(2)。ただし、日本語教科書において漢字表記されている混種語（266語）も含めたので、正確には語彙表の見出し語は「字音語と字音語基を含む漢字表記混種語」である。また抽出単位は教科書に提出されている単位（出現形）とし、それを語彙表の「見出し語」に立てた。

これら「見出し語」の中に、「一人(ｼﾞﾝ)、一中(ｼﾞｭｳ)」「…枚、…時間」など、「一」や「…」の記号も含め、各種日本語教科書の索引において、「～化、～間」のように「～」付きで提示されている語がある。索引において、語を「～」付きで提示する意図は、各教科書によって一様ではない。また同じ意味・用法の語でも、ある教科書は「～」付きで提示してあり、また別の教科書では「～」を付けないで提示してあるということもある。しかし、「～」付きの語は、各日本語教科書が特に「結合成分」であること、あるいは何らかの修飾語に限定されるものであることを明示した語と言える。またその「結合成分」には「接辞的成分」と言ってもよい語がかなり含まれていることから、ここでは「～」付き語を「接辞的漢語」と仮称して分析する。このように教科書の索引における「～」表示を基に調査対象を抽出する方法は、当然遺漏が予想される。また実際の指導の場で教科書に出現するその語が「接辞的成分」として導入されているかということは、索引における「～」表示の有無からだけでは判断できない面もある。従って本稿で調査対象となった語は、資料とした教科書における「接辞的漢語」の一部にすぎないとも言える。しかしそのような問題はあるにしても、これら「～」付き語の形態・意味・機能における特徴、及び出現度数を基にした各教科書間の共通度を分析することは、どのような単位形を「接辞的成分」として提示するべきかを考えるひとつの資料には成り得ると言えよう。

なお、本稿の分析対象は14種の教科書に出現した「～」付き語、167語である。（15種の教科書の中で、ｺｰﾄﾞ14『コンテンポラリー日本語中級』は「～」付き表示を採用していないため除外した。）

2．語構成上の機能による分類

日本語教科書において「～」付きで提示されている167語を「接辞的漢語」と称しているが、これらを教科書における用例を基に承接部分との結合関係で分類すると、実際は以下の2種に分けられる。

（1）連体修飾語によって限定されるもの｛～結果・～一方・～方｝
（2）合成語の成分となるもの

a) 単一成分 {～億・～時・～発・～化・諸～・各～・非～・毎～など}
b) 複合成分 {～時間・～先生・～学部・～方面・～同士・～以内など}
c) 普通では単位形と認めにくい成分 {～人分・～号室・～回以上など}

ここでは、（1）のような「結合成分」とは言えないものは除き、（2）の合成語の成分となる合計164語を「接辞的漢語」と総称し分析する。

語の用法を語構成上の機能で分類すると「自立用法・結合用法・接辞的用法」に分けられる。先の164語を単独で名詞あるいは副詞として用いられる「自立用法」のあるものを「自立形態」、他の語基や接辞と結合してのみ用いられる「結合用法や接辞的用法」しかないものを「結合専用形態」に分類すると以下のようになる。「自立用法」があるかどうかの判断は、そう簡単ではない。ここでは「単一形態」については『現代新聞の漢字』(1976)の分類に拠ったが、「複合形態」は内省に拠って判断した。ここで「形態」としたのは、例えば「～号線・～分間・～日分・～回以上」など「語」あるいは「語基」や「接辞」と言うには問題のあるものが含まれているからである。

〔自立形態〕８６語

単一：階・週・球・式・線・台・題・数・度・晩・円・億・会・回・園
錠・食・館・倍・番・便・本・役・用・塁・年・旧・語・字・対
非・上・中(ﾁｭｳ)・生・業・件・個・号・才・氏・章・代・秒・点
通・分(ﾌﾞ)・副・編・弁・分(ﾌﾞﾝ)
課・部・局・社・郡・市・区・県

複合：以上・以下・以前・以後・以来・箇所・航空・時間・時代・先生
団体・自身・世紀・全集・年間・番地・曜日・一杯・次第・学部
学科・教授・主義・専門・方面・番線・研究会・工学科

〔結合専用形態〕７８語

単一：家・札・月・間・君・系・軒・時・者・科・化・曜・巻・後(ｺﾞ)
港・校・歳・冊・酒・着・費・力・中(ｼﾞｭｳ)　・状・畳・城
人(ｼﾞﾝ)　・荘・足・丁・名・町・的・滴・人(ﾆﾝ)・店・頭・内・泊
発・枚・分(ﾌﾝ)・万・日(ﾆﾁ)・位・製・制・杯・半
各・御・諸・第・毎

複合：以降・以内・以外・同士・週間・丁目

特殊な複合：箇月・号室・日分・人分・人前・年制・年目・番目・分間
日間・号線・年前・時半・回以上・箇月間・時間目・人兄弟
第～号

日本語教科書において、ある語を「～」付きで提示するかどうかで揺れるものは、「自立形態」である。例えば「階・行・週・球・線・点」などは自立形態の「一字漢語」として教科書に提出されている。これらには教科書本文において「～」付き語の用法と同じ「結合成分」として使われているものも含まれている。先にも述べたように、この「自立用法」のあるなしの判断はそう単純ではない。例えば、〔結合専用形態〕に分類した「系」は専門分野（数学など）では自立的に使われることがある。〔結合専用複合形態〕とした「以降・以内・以外・週間・同士」は、意味の上からは明確な概念を表すものと言え、一般には自立的な二字漢語とされるものである。しかし用法としては単独で用いられることがなく、ここでは〔結合専用複合形態〕に分類した。語がどのような語構成上の機能を果たすかは、日本語学習者に情報として与えられる必要がある。特に、〔自立形態〕に分類されたような「自立用法」と「結合用法」（いわゆる「接字的用法」も含めて）を合わせ持つ「語基」は、造語力のあるものとして重要である。そしてそれらは、用法の違いによる意味的異同が明らかにされなければならない。例えば「球」と「～球」は意味の違いはあるが、そこには両者に意味的なつながりを認めることができる。しかし「本」と「～本」では、意味的な関連が全くない。そして、「本数・本店・本人・新刊本」などになるとその意味の違いはさらに複雑になる。また〔結合専用形態〕については、単独では用いられないものであるから「結合成分」であることが学習者に明確に示されなければならない。

先の分類を形態の面から見ると、日本語教科書に出現する「接辞的漢語」は多様である。特に〔結合専用複合形態〕の「特殊な複合」に分類したような「～人分・～人前・～年制・～番目・～人兄弟」などは日本語教科書の特徴的な「接辞的漢語」と言える。これらは合成語の成分となるものの中で、普通では単位形とは認めにくいものである。本稿では、これらをも便宜的に「語」と呼んできたが、以下では「形態」と言い換えることにする。

このように日本語教科書には一般的な「語」の枠を越えた「形態」が単位語（出現形）として提示されている。以下いくつかの「形態」を取り上げて、これら日本語教科書に出現する特徴的な「接辞的漢語」について、一単位形として出現する意味を考察してみたい。

日本語語彙における語構成意識の希薄な初級日本語学習者は、「～人(ニン)」と

「兄弟」を知っているからといって「～人兄弟」が構成できるものでもない。よく勉強している学生にかぎって「わたしは、三人兄弟です。」ではなく、「わたしは、三人の兄弟です。」と言ってしまうのである。「数詞＋助数詞＋体言」の結合型で同類に「三人姉妹・五人家族・一人暮し」などがあり、さらに「十個入り・三段重ね」などもある。これらをそれぞれ「～人姉妹、～人家族、～人暮し」という形で個別に学習語彙として提示することには疑問を感じる。しかし、「三人兄弟」などの語が文において一単位語として機能する点、また「三人友達・二人生活」などが熟さない語であるように、自由には合成できない点、また数詞の部分が変り得るという点から考えて、比較的使用頻度の高い形態を「～人兄弟」のようにひとつの「まとまり」を持つ単位形として提示する日本語教科書のありかたも意味のあることと言える。しかし、これらが「一人相撲・一人合点・一人占め」などの複合語に比べ、結合の緊密度において違いがあることも確かである。

また、「～番」と「～番目」の使い分けも難しい。「わたしは兄が二人います。一番の兄は会社に勤めています。二番の兄は学校の先生です。」という文を書いた学習者がいた。「～番」は順序や等級を表すが、該当の事物がどこに位置するかをいわば点としてとらえているものと思われる。それに「目」がつき「～番目」になると、該当する事物が端からたどって数えるとどこに位置するかを示し、いわば線上の点としてとらえるものと言える(3)。初級段階でこれらの意味の違いを説明することはかなり難しい。「～番目」は「～年目、～本目、～人目」などに比べ、比較的使用頻度が高いので、初級段階では用例を示し「～番目」の形態で導入するのもひとつの方法であろう。しかし、中級・上級では「～目」の意味・用法を整理し示す必要がある。なお、「日本国語大辞典」（小学館）では「番目」は「接尾辞」として見出し語になっている。

次に「～人前」を取り上げる。「まえ（前）」の意味は多義であるが、「三人前」など数詞「～人」と結合したときは「人数に相当する数量」を表す。「～匹前」や「～頭前」という言い方はできず、「複合形態」である「～人前」になって初めて「人数に相当する数量」という意味が決定される。しかも、この意味は普通の「まえ」の意味からはとても類推できるものではない。つまり、「～人前」は「複合形態」として新たな意味をもつと言え、このことから「～人前」が連語（単なる語の連接）ではなく、一単位を形成している合成語に準ずるものととらえることもできる。

これら普通では単位形とみなされない「複合形態」をひとつの意味を表す単位語として提示する日本語教科書のありかたは、語構成と意味の関係を考える上で示唆的である。またこれは、「意味のまとまり」を重視して語の単位を決定する

日本語教科書の姿勢を示すものとも受け止められる。このことは、「日本語教科書出現漢語対照語彙表」の見出し語の約30%が二次以上の結合語であることにも通じる(4)。

以上の点から考えると、「～番目・～人前」などの「複合形態」を一単位語相当とするのも日本語教育では有効と言えるが、これらを一単位として扱うのが適当であるかは、個々の形態について基準を設け更に検討する必要がある。

3．承接型及び品詞性による分類－新聞調査との比較

2．で述べたように日本語教科書に出現する「接辞的漢語」は、形態的に多様であるが、それらを品詞性や他語基との承接の型で分類してみる。

まず、164の「接辞的漢語」を結合の位置で分類すると以下のようになる。

接辞的漢語１６４語	（内訳）	前部分となる語	８語
		後部分となる語	１５４語
		その他の語	２語

その他は「第～号」と「～対～」の2語である。この2語を除いた162語の結合の位置による比率を野村(1979)の結果(5)と比べると次のようになる。

	日本語教科書	新聞
集計語数	162語（100.0%）	855語（100.0%）
前部分	8語（ 4.9%）	250語（ 29.2%）
後部分	154語（ 95.1%）	605語（ 70.8%）

「教科書」と「新聞」では集計語数に差があり、また調査単位も違うので（教科書は提出単位のままで前述のように形態的に様々であるが、新聞調査は短単位である。）結果の数値をそのまま比べることには問題もあるが、これらをそれぞれ<前部分>と<後部分>に分けて考察してみる。

日本語教科書の「接辞的漢語」を『現代新聞の漢字』における承接型の分類にしたがって分けると以下のようになる。なお、分類は教科書の用例に拠った。

（　）内は、『現代新聞の漢字』であげられている例の一部を示したものである。

〈前部分〉　　計８語

①体言型（核・党・都・県）　　０

②連体修飾型（大・高・新・好）　0
③連用修飾型（再・最）　0
④連体詞型（同・本・前・現）　5語　各・諸・副・旧・毎
⑤用言型（反・超・対）　0
⑥否定陳述型（無・不・非・未）　1語　非
⑦数量限定型（第・約）　1語　第
⑧敬意添加型（御）　1語　御

〈前部分〉については、上述の新聞の漢字調査では「体言型」と「連体修飾型」がそれぞれ35%～40%、「連体詞型」が10%～15%、「用言型」が約5%を占めるとされ、「体言型」は、種類は多いが結合力の大きいものは少なく、使用頻度の低いものが多く見られ、使用頻度の高いものでは「連体詞型」が最も種類が多いという。日本語教科書の調査では、<前部分>にくるものの比率が4.9%で新聞の結果29.2%と比べて極端に少なく、出現語数も8語しかない。従ってその傾向を読み取るのには無理があるが、8語のうち5語が「連体詞型」であるのは、初級、中級日本語教科書においては基本的で使用頻度の高いものが多く出現する可能性が高いことによると思われる。新聞において使用頻度の高い「体言型」が1語もないのは、日本語教科書の出現漢語に複次結合語が多いこととも関係している。例えば「核・区・式」は、教科書では「核家族・区役所・式次第」など三字漢語〈●＋（○＋○）〉の構成要素として出現する。同様に1語も出現しない「連体修飾型」「連用修飾型」「用言型」のものも「旧市内・再就職・過保護」など三字漢語の前部分として多く出現する。「否定陳述型」は「非」しか出現しないが、「不・無・未」は「不可能・不規則・無意味・無作為・未完成・未成年」など三字漢語として多数出現する。

野村(1979)の「新聞調査」によると（以下「新聞調査」と呼ぶ）〈前部分〉にくる「接辞性字音語基」のうち使用度数上位10語は「第・大・同・約・新・全・総・各・小・核」である。日本語教科書索引ではこのうち「第・各」だけが出現しているが、その他の語も「大企業・大事件・同年代・同程度・約五倍・新税制・新製品・全自動・全人類・小論文」」など三字漢語として多く出現する。「総」は「総参加意識」という五字漢語で出てくる。このように日本語教科書においては〈前部分〉にくる「接辞性字音語基」は複次結合語の構成要素として出現するものが多く、「接辞的漢語」としてはっきり提示されているものは少ない。このことは、日本語教科書が〈前部分〉にくる「接辞性字音語基」を「接辞」ととらえず、意味を明確に表す「語基」としてとらえる傾向が強いことを示していると

言える。

次に〈後部分〉にくる「接辞的漢語」を教科書の用例を基に分類すると以下のようになる。なお『現代新聞の漢字』の例は省略した。

〈後部分〉計１５４語

①体言型　　４０語

［組織・集団］園・店・科・会・*社・部・局・系・*町・学科
学部・研究会・工学科・団体

［人間］　家・人(ｼﾞﾝ)・者・生・同士・自身

［物］　*城・*荘・*酒・状・全集

［活動］　式・業・役・専門

［数量］　数・代・費

［時］　曜・曜日・時代

［抽象］　語・力・主義

［交通］　*線・*航空

②形式体言型　１５語　後・上・内・中(ｼﾞｭｳ)・中(ﾁｭｳ)・以下・以上
以外・以後・以降・以前・一杯・以内・以来・次第

③数詞承接型　８１語　位・円・億・課・日・階・回・月・巻・間・館
球・軒・件・個・校・号・歳・才・冊・札・時
字・週・章・畳・錠・制・足・台・題・通・滴
点・度・頭・人(ﾆﾝ)・年・杯・倍・泊・半・番
秒・便・分(ﾌﾞ)・分(ﾌﾝ)・分(ﾌﾞﾝ)・本・枚・万
名・塁・丁・晩・食・箇月・号室・号線・時間
時半・週間・世紀・丁目・日間・日分・人分・人前
年間・年制・年前・年目・番線・番地・番目・分間
箇所・回以上・箇月間・時間目・人兄弟

④人名承接型　５語　君・氏・編・先生・教授

⑤地名承接型　７語　区・郡・県・市・港・弁・方面

⑥用言型　４語　製・発・着・用

⑦純接辞型　２語　化・的

上の〈型〉の分類では②～⑤も①の「体言型」に含まれるものだが、種類が多いので別項にされている。『現代新聞の漢字』の調査でも③の数詞承接型が多い

こと、また⑥の「用言型」に属するものが少ないことが指摘されている。前部分にくる語と結合して、結合形全体の品詞性を変換するものが ⑦の「純接辞型」である。教科書の分類は先にも述べたように教科書における実際の用例を基に行っているので、一般的な分類とは所属が違っているものもある。

「体言型」の‘＊’付き語はそれぞれ「固有名詞」に承接するものである。また「数詞承接型」以外のもので下線の引かれている語は、日本語教科書において「数詞」に承接する用例も出現するものを示している。

「新聞調査」では、「体言型」に分類される「接辞性字音語基」は、［組織・集団］［人間］など、活動の主体となるもの、［活動］およびその所産に関するもの、［物］とくに生産物に関するものが多いことが指摘されている。教科書の分類でも「体言型」のものをおおよそ意味分野ごとに分けて示してみた。一番多いのが［組織・集団］、次が［人間］で、結果は「新聞」とほぼ同じである。調査対象が教科書であることを反映して、［組織・集団］の中で特に［学校］を中心にしたものが多くなっている。

「数詞承接型」もいわゆる「助数詞」以外、［時］［単位］［量］など、下位分類が可能かとは思うが、所属の決めがたいものも多いので意味分類はしていない。しかしその他の型に分類したものにも「数詞」に承接する用例があり、それらを入れると155語のうち91語（約59%）は、この「数詞承接型」である。いわゆる「助数詞」は初級日本語教育の重要学習語彙であるから、どの教科書でも必ず取り上げられる。従ってその占める割合も特に高くなっていると思われる。

「純接辞型」に分類した「化」は、「用言型」とも言えるが、結合形全体をサ変動詞の語幹に変える品詞性決定の機能をもつ点が他の用言型のものと異なる。これら「化・的」そして「接辞的漢語」に出現していない「性」などは三字漢語として数多く出現する。【日本語教科書出現漢語対照語彙表】には、947語の三字漢語が収録されているが、そのうち「化」を構成要素とするもの10語（一般化・情報化・合理化・洋風化など）、「性」は5語（国民性・重要性・信憑性・可能性・伝染性）、「的」は63語（慢性的・能率的・画期的・感情的・など）、計78語(8%)となっている。「化・的」など「接辞的漢語」のなかで、特に「接辞」と言ってもよいものでも、日本語教科書の索引においては、「～」付きで「接辞」であることが明示されず、三字漢語などの構成要素として提出される場合が多いのである。

しかし一方では、「新聞調査」において＜後部分＞にくる「接辞性字音語基」のうち、使用度数上位30語を調べてみると、そのうちかなりの語が「接辞的漢語」として日本語教科書に出現する。上位30語は以下のとおりである。

日・円・年・月・的・者・人ﾆﾝ・時・会・区／回・分ﾌﾝ・市・長・氏 党・県・中ﾁｭｳ・員・省／所・間・度・部・化・都・階・社・町・車

上位10語は、すべて日本語教科書の「接辞的漢語」として出現する。
20位まででは「長・党・員・省」、30位まででは「所・都・車」が出現しない。
しかし、30語のうち24語が「接辞的漢語」として教科書に出現する。これは、
＜前部分＞が上位10語で2語しか出現しないのとは対照的である。

以上述べたように、日本語教科書においては、「接辞的用法」のある形態も複次結合語の構成要素として提示されることが多いのであるが、中級以上の段階では、このような「接辞」や接辞性の強い語基については、「接辞的用法」を含め、それぞれの語基についてその語構成上の機能を明確に示し、それによって学習者の造語力を養う指導も重要である。

４．「接辞的漢語」の出現度数

【表１】は日本語教科書の索引に「～」付きで出現した漢語（字音語基を含む混種語も入れて）167語のうち「結果・方・一方」の3語を除外した164語を教科書の出現度数順に配列したものである。ここで言う出現度数とは、14種の教科書索引のうち何種に掲載されているかを点数で示したものである。【表１】で「総計」が出現度数を表す。「点」は、『日本語教育のための基本語彙調査』国語研(1984)の語彙表（以下「国語研語彙表」と呼ぶ）を基に、そこにあげられている他の「７種語彙表」(6)を合せた計8種語彙表の収録状況を点数化したものである。つまり各語彙表の出現度数（共通度）と言える。8種語彙表すべてに載せられているものは点8になる。なお、（ ）付きで示されているものは、「～」なしで収録されているものである。例えば、日本語教科書出現度数（総計）10の「～週間」は、点（4）であるが、これは「国語研語彙表」では「週間」の見出し語で収録されており、他の3種の語彙表にも載せられていることを表している。点が（ ）付きでないものは、「国語研語彙表」でも「～」付きで見出し語になっているものである。また、点0は「国語研語彙表」に収録されていないことを示す。

【表１】日本語教科書に出現する「接辞的漢語」出現度数順表

見出し語	総計	点
～枚	11	6
～箇月	10	4
～時	10	6
～週間	10	(4)
～階	9	6
～回	9	5
～時間	9	(8)
～度	9	(7)
～日	9	5
～人(ニン)	9	6
～年	9	6
～分(ブン)	9	(6)
～本	9	5
～円	8	6
～君	8	5
～歳	8	6
～冊	8	(5)
～中(チュウ)	8	(7)
～語	7	(6)
～後	7	(4)
～人(ジン)	7	5
～半	7	7
～以上	6	(8)
～月(ガツ)	6	5
～間	6	5
～台	6	7
～代	6	3
～軒	5	5
～個	5	6
御～	5	5
～中(ジュウ)	5	4
～足	5	3
第～	5	6
～年間	5	(2)
～泊	5	2
～発	5	3
～番	5	(7)
～分(プン)	5	0
～名	5	4
～用	5	(4)
～以外	4	(6)
～号	4	4
～畳	4	3
～製	4	4
～万	4	(4)
～以下	3	(7)
～以内	3	(5)
～化	3	4
各～	3	4
～時代	3	(7)
～錠	3	0
～線	3	(7)
～丁目	3	4
～同士	3	(4)
～杯	3	6

見出し語	総計	点
～倍	3	(6)
～番目	3	2
～秒	3	(5)
～部	3	0
～分(ブン)	3	(6)
～曜日	3	(1)
～以後	2	(6)
～億	2	(3)
～課	2	3
～箇所	2	(3)
～系	2	0
～号室	2	0
～才	2	6
～札	2	(6)
～市	2	(5)
～式	2	(6)
諸～	2	0
～世紀	2	(5)
～対～	2	(5)
～題	2	(5)
～着	2	2
～町	2	2
～的	2	2
～点	2	(8)
～店	2	2
～人分	2	0
～曜	2	(7)
～番線	2	0
～番地	2	3
～便(ビン)	2	0
～方面	2	(3)
毎～	2	6
～位	1	0
～以降	1	0
～以前	1	(5)
～一杯	1	(7)
～以来	1	(5)
～園	1	0
～家	1	4
～科	1	2
～会	1	(7)
～回以上	1	0
～学部	1	(3)
～箇月間	1	0
～学科	1	(1)
～巻	1	3
～館	1	0
旧～	1	(4)
～球	1	(4)
～業	1	0
～教授	1	(4)
～局	1	(5)
～区	1	4
～郡	1	(4)
～県	1	(4)

見出し語	総計	点
～件	1	0
～研究会	1	0
～港	1	2
～校	1	0
～工学科	1	0
～航空	1	(3)
～号線	1	0
～氏	1	4
～字	1	(7)
～時間目	1	0
～自身	1	(4)
～次第	1	(4)
～時半	1	0
～者	1	5
～社	1	0
～酒	1	2
～週	1	(4)
～主義	1	(6)
～上	1	(5)
～状	1	0
～章	1	(3)
～城	1	2
～食	1	0
～数	1	(6)
～生(セイ)	1	(2)
～制	1	0
～全集	1	0
～先生	1	(7)
～専門	1	(5)
～荘	1	0
第～号	1	0
～団体	1	(4)
～丁	1	0
～通	1	0
～滴	1	0
～頭	1	(4)
～内	1	(6)
～日間	1	0
～日分	1	0
～人兄弟	1	0
～人前	1	0
～年制	1	0
～年前	1	0
～年目	1	0
非～	1	4
～費	1	3
副～	1	3
～分間	1	0
～編	1	0
～弁	1	0
～役(ヤク)	1	(6)
～曜	1	0
～力	1	5
～墨	1	0

【表２】

出現度数別　語数と比率

度数	語数と比率	累　積
１４	0(0)	0
１３	0(0)	0
１２	0(0)	0
１１	1(0.6%)	1(0.6%)
１０	3(1.8%)	4(2.4%)
9	9(5.5%)	13(7.9%)
8	5(3.0%)	18(10.9%)
7	4(2.4%)	22(13.3%)
6	5(3.0%)	27(16.6%)
5	13(7.9%)	40(24.5%)
4	5(3.0%)	45(27.5%)
3	16(9.8%)	61(37.3%)
2	26(15.8%)	87(53.1%)
1	77(46.9%)	164(100.0%)

【表３】

「特殊な複合形態」教科書出現状況
教科書はｺｰﾄﾞで表した(注1参照)。

教科書	語例
０１	箇月
０２	箇月
０３	箇月
０４	箇月　番目
０５	箇月　番目　号室　人分 年制　年前　年目　時半 箇月間　人兄弟
０６	箇月
０７	箇月
０８	箇月　号室　人分 日分　分間　時間目
０９	箇月　番目　人分 人前　日分
１０	箇月　号線
１１	ナシ
１２	回以上
１３	第～号
１４	ナシ

日本語教科書の出現度数は、教科書間の共通度を示すものと言える。【表２】は【表１】を基に、出現度数別に「接辞的漢語」164語の語数と比率及びそれらの累積の語数と比率を示したものである。14種の教科書のうち「～枚」の度数11が最高で、度数11～2までの語は87語で、53.1%を占めるに過ぎない。約半数の語が1種の教科書にしか出現しない。このように教科書間の共通度が低いことは、「接辞的漢語」だけでなく日本語教科書に出現する漢語全体についても言えることであり、国語研(1982)では「７種語彙表」の共通度も低いことが指摘されている(7)。度数11～4までのかなり共通度の高い45語について見ると、「君・中(ﾁｭｳ)・語・後(ｺﾞ)・人(ｼﾞﾝ)・以上・代・御・中(ｼﾞｭｳ)・発・用・以外・製」の13語を除いて、32語（「第～」も含めて）が「数詞承接型」の語である。

〈後部分〉にくる「接辞的漢語」154語のうち、81語が「数詞承接型」であるから、「数詞承接型」の語は数も多く、また教科書間の共通度も比較的高いと言える。意味分野では「日・月・時・週・年・秒」など［時(ﾄｷ)］を表す語が多くなっている。この「とき」を表す語が多いのは、「接辞的漢語」だけでなく、日本

語教科書の漢語全体に言える特徴である(8)。

度数1の語は、「年制・箇月間・時間目・第～号」など、二字以上のものが比較的多い。

【表３】は、「２．語構成上の機能による分類」で「結合専用の特殊な複合形態」に分類した18語の出現状況を教科書ごとに示したものである。

この中で、「～箇月」は一単位形としてかなり定着しており、多くの辞書で見出し語になっている。ここでも出現度数10で他を圧倒している。その他の内14語は度数1であるが、教科書ごとの出現状況から偏りがあることが分かる。［05］は特に「特殊な複合形態」が多く出現する教科書で、次に［08］［09］と続く。それぞれれの教科書が、何を一単位の「接辞的漢語」とするかによって様々な形態の語が提出されることになるが、それもその教科書が提出語彙の形態をどのように考えているかという姿を反映したものと言える。しかし、「箇月」以外の「特殊な複合形態」が複数の教科書、特に初級教科書において単位形として出現することは、語構成についての指導が十分ではない初級学習者に、一般的に考えられている「一単位語」にとらわれず、「意味のまとまり」を重視した形態で学習語彙を提示する教科書が多いことを示しているとも言える。これら「複合形態」の「接辞的漢語」は、先に述べたように教科書間の共通度も低く、また「他語彙表」に収録されているものも少ない。そして、これまで普通では単位形として認められることもなく、従って形態論や語構成論において考察の対象には成り得なかった。しかし、日本語教育における効果的な語彙指導を考える上で、どのような形態を単位語とするかは根本的な問題であり、これら「接辞的複合形態」の分析もさらに進められる必要があると思う。

【表１】の「点」についてさらに見ると、（　）付きで示されているものが目につく。これらは、「国語研語彙表」において「～」の付かない形で提示されているものだが、多くは自立用法のあるもののようである。（なお「国語研語彙表」では「～」ではなく「－」の記号が使われている）しかしそれも一定しているわけではなく、例えば「冊・後・頭・内」などは「自立用法」はないと言えるが、「国語研語彙表」では「～」なしで載せられいる。また一般に二字漢語と言われる「以内・以外」など「２．語構成上の機能による分類」で〔結合専用複合形態〕に分類したものは実際は単独で用いられることはない語である。これらは、「国語研語彙表」では「～」付きにはなっていない。「国語研語彙表」は日本語教育のための基本語彙設定の資料で、規範的なものではないとされているが、学習者に上述のような〔結合専用形態〕を提示する時は、「～」付きで結合成分であることを明示すべきである。

7．おわりに

以上、日本語教科書に出現する「接辞的漢語」を「語構成上の機能」「承接型及び品詞性」「教科書間の共通度（出現度数）」の三つの観点から、分析・考察した。

特徴として挙げられるのは、日本語教科書では「接辞的漢語」として多様な形態の語が学習語彙として提出されていることである。それらが日本語教科書の単位語（出現形）として妥当なものであるか否かは検討の余地がある。それには、これまでの「語」と「接辞」という枠組みを越え、「語構成」「意味」「造語力」や「使用頻度」などから見て、日本語教育の上で単位語とするにふさわしい形態は何かを検討しなおす必要がある。また、これらの漢語の意味・用法の記述のためには、自立用法や結合用法などの用法間での意味的関連の度合いや異同、さらには類義関係にある漢語の意味・用法の違いが明らかにされ、整理されることが求められる。そして日本語教育においては、さらにそれらの研究内容をどのように教材化して提示するかを考えることも必要である。

注(1)　以下に資料とした教科書の一覧を示した。教科書の選定にあたっては、できるだけ基本的な漢語を広く収集するため、学生・一般人を学習対象者とする総合的な日本語運用力の習得を目指すものを主とした。

１５種教科書一覧

０１	初	外国学生用日本語教科書初級(改定版)	早稲田大学日本語研究教育センター　1988.4.1　再訂版第９刷	留学生
０２	初	初級日本語	東京外国語大学附属日本語学校　三省堂　1990.9.10　第２刷	留学生
０３	初	現代日本語	亜細亜大学留学生別科　1986.5.31　改訂第２版第２刷	一般人
０４	初	日本語初歩	国際交流基金　1986.7.30　改訂版第３刷	一般人
０５	初	横山さんの日本語	日本語教育センター　1989.1.1	一般人
０６	初	新日本語の基礎	海外技術者研修協会　1990.12.20 第２刷	技術研修生
０７	初	別科・日本語１	長崎総合科学大学別科　1989.3.31	留学生
０８	初	文化初級日本語１，２	文化外国語専門学校　1987.4.1	留学生
０９	初	日本語でビジネス会話初級編	日米会話学院　1989.6.	成人
１０	初	Basic Functional Japanese	The JapanTimes　1987	英語圏成人
１１	中	日本語中級１	国際交流基金日本語国際センター　凡人社　1990.7.25 第１刷	海外一般人
１２	中	総合日本語中級	水谷信子　凡人社　1989.3.10 初版第２刷	一般人
１３	中	中級から学ぶテーマ別日本語	研究社出版　1991.4.25 初版	学生・一般
１４	中	コンテンポラリー日本語中級	桜楓社　1990.8.5　第２刷	学生・一般
１５	中	現代日本語コース中級１，２	名古屋大学総合言語センター日本語科　1990.1	留学生

(2) 山下(1991)『日本語教育のための漢語研究ーー日本語教科書出現漢語対照語彙表の分析と考察』(修士論文)で作成した資料である。

(3) 森田 (1989)『基礎日本語辞典』P1122では「ーめ」について、以下のように述べられている

並列しているものを端から順番に一、二、三…と当たっていった場合、該当の事物がどこに位置するかを示す発想である。行為として順に繰り返される回数意識の場合と、ただ並列するものを端から順にたどり数えていく序列意識の場合とがある。「〜め」という以上、必ず「一、二、三…」と区切れの順にたどっていく数意識が根底にある。中略「一」に付く場合でも、以下「二、三、四…」と続くことを前提としている発想と考えていい。

(4) 山下(1991)P32【表2-1】見出し語の単位数による分類によると、三字漢語21.2%、四字漢語8.3%、五字以上の漢語1.7%である。

(5) 野村雅昭(1979)「接辞性字音語基の性格」P105 「表1 字音語基の語構成単位別の使用度数」の数字から割出した結果である。

(6) 他語彙表一覧は以下のとおりである。

1. 日本語基本語彙(国際文化振興会. 1944)

2. 日本語教育における基礎学習語(加藤彰彦 日本語教育学会『日本語教育』2 1963.4)

3. Practical Japanese-English Dictionary (玉村文郎 海外技術者研修協会 1970,1978)

4. A Classified List of Basic Japanese Vocabulary (J.V.Neustupny Monash University,Department of Japanese,Melbourne 1977)

5. 外国人のための基本語用例辞典(文化庁国語課1971,1975)

6. 留学生教育のための基本語彙表(吉田弥寿夫・樺島忠夫 大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』2)

7. 現代雑誌九十種の用字用語第一分冊(国語研. 1962)

(7) 1種の教科書にしか出現しない度数1の語は60.85%を占め、度数3以上の語は24.22%に過ぎない。国語研(1982)は、各語彙表間での語彙の共通度を表に示し(P10)、その共通性の少ないことを指摘している。

(8) 山下(1991)P74〜「第四節 意味分類」による。異なり語数の多い意味分野を上から五つ挙げると[心・時間・言語・量・職]である。出現度数8以上の語では [時間・量・心・言語・生活]の順で、[時間]に属す語が一番多くなる。

【参考文献】

石井正彦(1989)「語構成」(『講座日本語と日本語教育6 日本語の語彙と意味(上)』明治書院)

影山太郎(1989)「形態論・語形成論」(『講座日本語と日本語教育11 言語学要説(上)』明治書院)

国立国語研究所(1976)『現代新聞の漢字』(国語研報告56)

(1982)『日本語教育基本語彙七種比較対照表』(日本語教育指導参考書9)

(1984)『日本語教育のための基本語彙調査』(国語研報告78)

斎賀秀夫(1957)「語構成の特質」(『講座現代国語学Ⅱことばの体系』筑摩書房)

阪倉篤義(1966)『語構成の研究』(角川書店)

野村雅昭(1973)「否定の接頭語「無・不・未・非」の用法」(『国立国語研究所論集ことばの研究4』)

(1977)「造語法」(『岩波講座日本語9 語彙と意味』)

(1979)「接辞性字音語基の性格」(『電子計算機による国語研究Ⅸ』(国立国語研究所報告61) 秀英出版)

(1988)「漢字の造語力」(『漢字講座1 漢字とは』明治書院)

林大 監修(1982)『図説日本語』(角川書店)

水野義道(1987)「漢語系接辞の機能」(『日本語学』明治書院 VOL.6)

宮地 裕(1973)「現代漢語の語基について」(『語文』31 大阪大学)

(1978)「モーフ(morph)の論」(『論集日本文学・日本語5 現代』角川書店)

(1979)「現代語の語構成」(『国語と国文学』56-1)

(1982)「現代語の語構成」(『講座日本語の語彙第7巻現代の語彙』明治書院)

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』(角川書店)

『日本語学』VOL.5 (1986.3) 特集「接辞」(明治書院)